

初めに

北野高校のほとんどの生徒は、大学進学を目指していることだろう。大学や大学生活にどんな希望を持っているだろうか。



大学とは勉学・研究が主たる目的である。しかし高校までと違って、様々な地域から学生が集まってくる。お互いに地元の話をする、同じ日本でも随分と違った文化に触れることができる。テレビで言っていることも、大げさだったり、本当だったりして驚かされる。

関西圏以外の大学に進学すると、自分が各地から集まってくるうちの一人になる。関西圏内の大学に進学すると、他府県から多くの学生を迎え入れることになる。どちらの場合でも、近くて遠い他文化に触れる機会がどっと増えることだろう。

言い古されてはいても、方言の違いは鉄板のネタであるし、食べ物の食べ方の違いも面白い。有名なお祭りの裏側も聞けることもあるし、民話にも独特なものもある。さらに多くの留学生もいる。外国の文化にも十二分に触れることができる。

さて、他の文化に驚いてばかりではいけない。皆さんは、大阪のことをいくつ知っているだろうか。みんなが地元の話をもっと自信たっぷりに披露しているのに、大阪の話が盛り上がりがないわけにはいかない。「大阪人はボケとツッコミばかりじゃない。」「たこ焼きには天かすが必須！」なんて、まるで素人の話題である。

今回は図書館で巡る大阪の話題を紹介しよう。詳細なことまではあえて掲載していないので、これに興味を持ったら、ぜひもっと読んでみよう。もちろん、現地に行くまでが正しい楽しみ方である。

1. 大阪「地理・地名・地図」の謎  
著者：谷川彰英 出版社：実業之日本社  
291/T30/1

1-1：十三  
我が北野高校の最寄り駅は十三駅である。最初に見たとき、読み方よりも一～十二はあったのかどうかの方が気になった。例によって諸説あるのだが、結論から言えば、やっぱり一から十二までもあったようだ。主な説には二つある。いずれにせよ大阪市内の人間の生活は、やはり淀川と深く結びついているようである。

1-2：大阪市営地下鉄は法的には路面電車  
法的な分類だけで、他に大きな違いはないらしいが、大阪の地下鉄は路面電車のカテゴリーに入るらしい。その由来は大正七年にまで遡る。市内の交通整理を進めるために、道路整備と地下鉄建設が同時に行われた。この時、財源確保のためある施策が、地下鉄を路面電車のカテゴリーに入れることになった。

蛇足だが、地下鉄工事の際に出た大量の土砂は私の生まれ故郷である大阪市内某区に積み上げられ、市民の憩いの公園となっている。

1-3：浪華八百八橋  
夢日記ではないが、八百八町と言えば江戸、八百八寺といえば京都、では大阪は？ご存知かな、八百八橋である。私はずっと大阪にとっても橋が多いので、そう呼ばれていると思っていた。しかし江戸時代では江戸に350橋、大阪に200橋あった。なんだ、言うほど多くはないか。いったいなぜこのような言葉が生まれたのだろうか。一つ言えること、それはこの言葉には民衆の橋への思い入れの強さが表れているのだ。

2. 大阪「高低差」地形散歩  
大阪「高低差」地形散歩・広域編  
著者：新之介 出版社：洋泉社  
454/O3/1、454/S1/2

2-1. 再び十三  
以前、地学の授業で十三周辺のハザードマップを見たとき、北野高校前の十三公園には、浸水被害が予見されていないと知った。最初は調べもせず、有事の際に避難所になるように工夫して設計していると思いきや、なるほど。ほんのちょこっとのことなんだけど。

2-2. 大阪城  
大阪城は大阪のシンボルの一つである。私は歴史にかなり疎いが、強固な土地に作られているだろうとは思っていた。ふむふむ。なかなかの良いお土地柄で。時の為政者たちは目をつけるわけだ。彼らはいろんなことにアンテナを張っていたと思わされる。地学を勉強しようとして、日本史が学べるとは。

2-3. 大阪駅  
他府県から引っ越ししてきた友人ができること、きっと彼らは大阪駅の微妙な段差に疑問を抱くことだろう。そんな時には、ちゃんと説明してあげよう。多くの人の汗で食い止めたものなのだと。

2-4. 万博で88  
これを読んでいるほとんどの皆さんにとって、万博なんて歴史上の出来事なのだろうか。万博跡地は綿密な計画の基に、万博記念公園として変貌を遂げたようだ。とはいうものの、うらはらにざっくりしたところもある。ぜひ行って見てみよう。立っているそこには、きっと……。

3. 大阪自然史ハイキング  
著者：地学団体研究会大阪支部 出版社：創元社  
455/C1/1

大阪府内のいたるところの露頭を懇切丁寧に解説してくれている。細かな数値まで書いてくれていて、まるでそこに行った気分にする。北野高校では、誰が読んでも、どこかに地元のことを説明してくれているのではないだろうか。

しかも、この本は各章の冒頭に「見どころ」として、概論を掲載してくれている。地学を学んでいない人のためにも、ところどころで解説も載っている。初心者にも優しい構成にもなっているのだ。

さらには流れるような説明文は、まるでガイドさんがしゃべっているように軽快で、すすっと読み進められる。手書きのイラストは、昨今の綿密に懇切丁寧な図よりもむしろ分かりやすい。白黒だが、写真も多数載っている。あ、アンモナイトの化石が採れるところが書いてある！

などと、これだけ熱弁をふるっておきながら、この本の出版は1987年。なんと30年前ではないか。目に見える部分は変わってしまっただろうが、大阪の地質構造は同じだ。見えないところにも、いろんな地形があることに気が付いてほしい。若い皆さんにも30年という時間の流れを感じることができるのではないだろうか。

初めに

高校生の時の私には、憧れがあった。大人たちが口々にその話で盛り上がる。一応若かった私には、それが一つの大人の階段であるように思えた。

一方、その時の私はどちらかと言えば、頭痛に悩んでいた。ちょっと何かがあると、すぐ頭痛になる。大学生のときには、眼精疲労も加わった。これらが実に絶妙で、ちょうど軽く意欲を削ぐぐらいの、決して重くはない程度。いっそ寝込むなら割り切れるのに。体調万全でもない。性格も中途半端ならば、体調不良も中途半端である。

中途半端な体調不良になると、気が滅入る。宿題、レポート、定期考査、新発売のゲーム……。計画倒れの列挙に暇がない。ちょっと頑張ればいいのだが、ちょっとだけ頑張る状態が続くので、煮え切らない思いだ。頑張ることに飽きもしてくる。そうすると、切々とした恨み節に心がとらわれる。さらには健康そうな人を見ると、表に出さないものの禁じ得ない逆恨みの念がほとばしる。体と気持ちがいずれも悪循環である。

ある時、テレビで眼精疲労の薬のCMを見た。なに？神経がほぐれて、目が楽になるって？え、眼精疲労の原因は目の酷使だけじゃないのか。湿布でも貼ってみよう。あれ？ついでに頭痛も直ったやん。ということは、ちょっと近所のマッサージ店に行ってくる。はあ？ここって骨じゃなくて筋肉が強張って硬くなっているですとー！？帰り道は、体重は重いのが心が軽く、ちょっと小躍りなんかしてみる。

どうやら高校時代から私は、その憧れを余すところなく十二分に満喫していたのだった。

体の不調と気持ちの乱れは複雑にもつれている。どちらが先かは鶏と卵の議論になってしまうが、本当に先なのは、治療である。皆さんもうまくいかないときは、いろんな方法を試してみています？図書館にもいろんなヒントが転がっているので、実際に来て読んでみよう。

きちんと押せる、ホントに治せるツボの医学事典  
星 虎男著 主婦の友社 刊

492/H1 /1

体の中の「ツボ」とは何なのか。理論的な説明をしてくれる。ツボの探し方、一覧表も全身くまなく掲載してくれている。足のツボについてはさらに解説が詳しい。「なでる」「もむ」「たたく」「指圧」といった方法論もある。知識0の状態から始められる。日頃の体調管理に試してみよう。

&lt;眼精疲労&gt;

「清明」が効くのは経験的に知っている人も多いことだろう。さらには、「瞳子膠」。これもまあ、目の周りだから、知らず知らずのうちに押している人もいるだろう。が、「曲池」や「束骨」なんてのがあるとは。「曲池」がやりやすい。

&lt;むくみ&gt;

むくみを意識したことのない人は、張り裂けそうな状態ばかりを思い浮かべているかもしれない。結構身近に見られるのである。ここでも「瞳子膠」が効くようだ。私には「腎俞」が良い。自覚がないときでも、足がスッキリする。

&lt;眠気覚まし&gt;

何かにつけ「合谷」は万能である。「上眼窩点」も良いそうだが、結構痛い。痛みで目が覚めるのかと思うほどだ。「膻中」なら、あまり痛くない。負けそうな授業中には頑張らしましょう。

&lt;血圧が高い&gt;

むくみと一緒にとりあえずやってみると、効き目を感じることもある。「人迎」などは気軽にできる場所だし、傍目にも何かしているように見えないので、気になったらすぐにできそうである。

科学的に元気になる方法集めました  
堀田秀吾著、文響社 刊

498/H12/1

よく聞く話だと、侮ることなかれ。全て世界中の研究を根拠にしている。本文中の説明も説得力がある。多くの方法があるので、お試しあれ。

「各界の一流たちが実践しているやる気スイッチの入れ方、それはとにかくやり始めること。」これは古今東西ずっと言われ続けていることだ。改めて読むと、そうしようかと思えてくる。

「やらせ成功体験でモチベーションを高める。」マラソンの走り方とかで例えられる話だ。分かってはいるけれど、目標を高く持つと、こういったことを飛ばしてしまわないだろうか。

「減点法で人を見ていると、イライラが止まらなくなる。」

小中高で40人もが狭い教室にいた。しかし、大学のゼミは定員とは裏腹にもっと狭い環境だった。いや、面積ではなく、人間関係が。その中で渡り歩かねばならないのだった。

「青空を見上げることで、神経が落ち着き、姿勢が正され、気分が整う」

自動車学校へ合宿で通ったのだが、逃げ場がないのでつまずくと追いつめられる。そんな時に詩人になって思っていた。「最近青空を見てないなあ。」この思考は正しかったのか。

「勝負の直前に不安を書き出すことでパフォーマンスがむしろ高まる。」

むしろ不安をあおりそうだが、確かに説明を読むと納得。逃げちゃダメだという意味じゃない。

新しい人体の教科書 上・下  
山科正平 著、講談社 刊

491/Y11/1-1、2

ポイント1)解説がスムーズ

高校の教科書に載っている内容から始まり、どんどん人体の詳細な説明に移り変わっていく。生物が必要な人は、授業の予習復習にもなるだろう。必要がない人も、予備知識の解説から始まるので、読みやすい。生物の授業でちょっと物足りない人は、是非とも読んでみよう。

ポイント2)イラストが分かりやすい

人体に限らず、イラストよりも実物の写真があった方が分かりやすく、説得力があるというもの。だが、この本のイラストは、要所を押さえて書いてくれている為か、非常に見やすいだけではなく、分かりやすい。

ポイント3)ヒトの発生

生物の授業では、ヒトの発生については少し触れる程度だ。この本では、その解説も十二分に行われている。特に異常妊娠の記述は多くはないが、読んでおきたい。上下巻全体で折に触れて胎児について記述されている。自分たちの命が、どのように生まれてきたのかをちゃんと知っておこう。

その4)病気について

あくまでも付け足しという内容だが、病気についても簡単な解説が記載されている。病気のしくみが分かっているならば、多少なりとも気持ちの整理ができるかも…しれない。

冬休みに向けて長期貸出中。

12月5日～1月9日まで 10冊まで貸出可。  
この機会に、たっぷり読書してください。